

震災の直前、二月末から三月初めにかけてインドネシアに行ってきた。シンガポールで学会が開かれたのを機に、足をのばして、マンガ市場の調査旅行を行うことにしたのである。

シンガポールでもインドネシアでも資本文化が健在であることが確認できるなど、たくさんの収穫があったのだが、なかでも印象深かったのは、「インドネシア漫画の父」と呼ばれるコサシ氏に、直接おめにかかってお話を聞けたことであつた。

現地で案内役を務めてくださったのは、ジャカルタで日本式マンガスクールを開く前山まち子先生。私がインドネシアローカルの漫画にも興味を持つていたことを知った彼女は、なんと私の到着一週間前、インドネシアの古いローカル漫画の復刻を手掛けているという出版社兼書店の代表者と知り合う。さっそく行ったその店ですぐに私の目に飛び込んだのが、伝統的なワヤンスタイルで描かれた、コサシ氏の筆になる『ラーマーヤナ』。そのコサシ氏に会えたのだ！

九〇歳を超えるコサシさんは車椅子こそ使っているものの、かくしゃくとして、何より記憶が確かで、すべての返答が明快極まりない。それまでの取材で、インドネシアでは常にあいまいな返答しか戻ってこないことに慣れていたから、まずこのこ

プロフィール

1959年熊本県に生まれ。評論家、明治大学国際日本学部准教授。漫画、ジェンダー論を中心に、評論活動をおこなう。元編集者でもあり、関心分野における評論書籍等を数多く手がけてきた。おもな著作に『私の居場所はどこにあるの?』（学陽書房）『快樂電流』（河出書房新社）など。



インドネシア漫画の父・コサシ氏と出会う

藤本 由香里

とにびつくりした。

デビュー作である『スリアシ』（一九五三年）は、インドネシア初のコミックブックで、最初は楽器を売るシヨップの片隅に置かれていた。しかしこれが評判を呼び、通信販売であちこちで読まれるようになったという。「インドネシア語で読めるアメリカンスタイルの漫画、しかも衣装や物語の舞台はインドネシア、すごい！」というわけだ。私はここで気になっていたことを聞いてみた。

「インドネシアではなぜアメリカンコミックの影響が強いのか？ コサシさんはどこでアメコミを読んだのか？」答えは驚くべきものだった。

「当時、バナナなどを買うと新聞紙で包んでくれた。インドネシアでは新聞紙が足りず、アメリカが古新聞を送ってくれた。そこには、動きのある、見たこともない漫画が載っていた。言葉はわからないけれど、子どもの頃からそれを夢中で模写したんだ」

ルーツは「商品を包んだ新聞紙」。浮世絵が欧米に伝わった時を髣髴とさせるエピソード。そしてコサシさんのスタイルが、後続の漫画家たちに引き継がれていく。頭の中でカチツと音がするような、鍵になる証言。だから調査は面白い、心からそう感じた瞬間だった。

月刊
みんぱく
7月号目次

- 1 エッセイ 千字文
インドネシア漫画の父・コサシ氏と出会う 藤本 由香里
- 2 特集 海とともにいきる
——あたらしくなったオセアニア展示
- 3 海を渡ってオセアニアへ 菊澤 律子
- 5 アニメで見る航海術 須藤 健一
- 6 島に生きる戦略 印東 道子
- 7 ヴァヌアツのパワースポット 白川 千尋
- 8 オセアニアの教会衣装集め始末記 丹羽 典生
集散するコレクション 林 勲男
- 10 研究フォーラム
みんぱく公開講演会
自然と向きあう人びとの今——太平洋とアフリカに見る
太田 心平
- 12 みんぱく Information

- 14 地球ミュージアム紀行
博覧会から博物館へ
万博・民博・海洋博
宇野 文男
- 15 みんぱく 私の逸品
石貨
小林 繁樹
- 16 散策と思索の径
「されば、いざたて、アルジュナよ」
新江 利彦
- 18 多文化をささえる人びと
愛川町役場の20年
実践のなかでみつけたもの
窪田 暁
- 20 歳時世相篇
祖先とともに過ごす夏
中国雲南省ペー族の場合
横山 廣子
- 22 フィールドで考える
「慈愛」に覆い隠された僧侶のジレンマ
岡部 真由美
- 24 次号予告・編集後記